

新見公立大学紀要 第34巻
pp. 147–150, 2013

資 料

母親を対象とした歯科保健に関する研究の動向と課題

吉田 美穂*

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

健康日本21では「歯の健康」分野が設けられるなど、国民の歯科保健の重要性は明らかである。乳幼児期においてはう蝕罹患率は減少傾向であるが、健康日本21の目標値は達成していない。乳幼児のう蝕予防は養育者が担っており、その中でも母親の役割は大きい。そこで、母親を対象とした歯科保健の研究の動向を分析し、今後の乳幼児期からの歯科保健の課題を明らかにすることを目的に文献検索を行い、対象文献21件を抽出した。先行研究の研究方法は調査研究がほとんどであった。内容別に分類すると、「乳幼児の歯科保健について」が12件、「母親自身の歯科保健について」が4件、「妊娠期の歯科保健について」が5件であった。乳幼児についてのものが半数以上を占めたが、母親の歯科保健が重要であるとの報告もあった。また、乳幼児と母親の口腔環境の改善を同時に行う利点を述べた研究もみられたが、ごく一部であり、一般化することは難しいと考える。今後、母親の口腔環境の現状について調査していく必要性が示唆された。

(キーワード) 歯科保健, 母親, 乳幼児,

はじめに

生涯にわたり自分の歯を20歯以上保つことにより健全な咀嚼能力を維持し、健やかで楽しい生活を過ごそうという考えのもと、1989年に「8020運動」が厚生省(現厚生労働省)と日本歯科医師会により提唱された¹⁾。2003年に制定された「21世紀における国民健康づくり運動(健康日本21)」において、「8020」の実現を基本方針として、「歯の健康」分野においても目標値が掲げられた²⁾。乳幼児から各ライフステージに応じた具体的な対策も明記されている。う蝕、歯周病は歯の喪失原因の9割を占めるとされている³⁾。そのため、口腔の健康は、国民が健康で質の高い生活を営む上で基礎的かつ重要な役割であるとして、2011年「歯科口腔保健の推進に関する法律」が施行された⁴⁾。う蝕及び歯周病に代表される歯科疾患は、初期の段階でのセルフケアにより改善を見込むことができるとされ、特に乳幼児期においてはう蝕予防が大きな課題である⁵⁾。現在、乳幼児健康診査において歯科検診を行うなど対策が講じられており、う蝕罹患率は減少傾向にあるものの、国が掲げている目標達成には至っていない⁶⁾。乳幼児期の歯科保健については、養育者が乳幼児の口腔環境を整える必要があり、母親を対象とした研究が多くみられる⁷⁻⁹⁾。そこで、今回は健康日本21が制定された2003年から2013年までの母親の歯科保健に関する研究の動向を調査し、今後の課題を明らかにする。

I. 研究目的

母親を対象とした歯科保健に関する研究の動向を分析し、今後の課題を明らかにする。

II. 研究方法

1. 対象文献

Web版 Ver.5 医学中央雑誌(以下「医中誌」)とCiNii国立情報学研究所論文情報ナビ

ゲータ(以下「CiNii」)を使用し、2004年から2013年の10年間の文献の中で医学系雑誌や会議録、抄録を除いた原著論文、研究・報告を文献として、キーワード「歯科保健」「母親」で検索を行った。結果、医中誌34件、CiNii14件であった。合計48件の検索結果の中から、タイトル・要旨を参考に重複を避けて21件抽出し、分析対象とした。

2. 調査対象期間

2004年から2013年の文献である。

III. 結果

2004年から2013年の10年間の歯科保健に関する原著論文を21件抽出した(表1)。内容別に分類すると、「乳幼児の歯科保健について」が12件、「母親の歯科保健について」が4件、「妊娠期の歯科保健について」が5件の3項目

*連絡先: 吉田美穂 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

表1 対象文献

| 著者 | タイトル | 誌名 | 方法 |
|------------------|--|---------------------------------|-----------|
| 小林夏菜 | 保育園児の保護者と女子大生における歯科関連知識と健康行動に関する調査 | 日本歯科大学東京短期大学雑誌, 1(1), p54, 2012 | 量的研究 |
| 村井裕子 | 歯科を利用する身体障害のある子どもの口腔ケアにおける母親の工夫 | 日本小児看護学会誌, 21(1), p17, 2012 | 質的記述的デザイン |
| 園部晋也, 牧内忍, 他1名 | A町における3歳児う蝕に関する母親の育児意識と歯科保健行動 | 沖縄の小児保健, 38, p31, 2011 | 量的研究 |
| 曾我部夏子 | 1歳2か月児における母乳継続状況生活習慣およびう蝕との関係 | 小児保健研究, 70(4), p479, 2011 | 量的研究 |
| 大須賀蕙子, 千野直仁 | 幼児のう蝕有病と生活習慣・生活環境複合要因 | 心身科学, 2(1), p17, 2010 | 量的研究 |
| 葭原明弘, 金子昇, 他4名 | 乳幼児健診に併設し実施する簡易スクリーニング検査および個別指導が行動変容に及ぼす影響 | 口腔衛生学会雑誌, 60, p11, 2010 | 介入研究 |
| 茂川秀治 | 保育園児の齲蝕とその影響要因に関する口腔保健学的研究 | 日本歯科医療管理学会雑誌, 45(2), p121, 2010 | 量的研究 |
| 藤川由美, 中岡有佳 | 乳歯齲蝕予防に関する妊産婦教育の評価 母親教室歯科講座における調査から | 日本歯科衛生学会雑誌, 5(1), p89, 2010 | 量的研究 |
| 都築佑子, 志村千鶴子 | 乳幼児を持つ母親の妊娠期及び育児期の口腔ケアに関する意識と行動の実態 | 日本ウーマンズヘルス学会誌, 9, p93, 2010 | 量的研究 |
| 青柳千春, 濱寄朋子, 他5名 | 若年者のカリエスリスク因子分布に関する研究 | 口腔衛生学会雑誌, 59, p173, 2009 | 介入研究 |
| 藤岡万里, 吉田美幸, 他7名 | 産科併設歯科で行う「出産後歯科健診(ママ・サポート歯科健診)」について アンケートからの報告 | 小児歯科学雑誌, 47(5), p738, 2009 | 量的研究 |
| 笹原妃佐子, 河村誠 | 『親子歯科健診』に参加した母親の歯科保健行動の経年変化 | 広島大学歯学雑誌, 39, p140, 2007 | 量的研究 |
| 笹原妃佐子, 大谷裕幸, 他2名 | 母親の年齢および子どもの出生順位と母親の歯科保健行動との関連 | 広島大学歯学雑誌, 57, 671, 2007 | 量的研究 |
| 佐藤公子, 小田慈, 他1名 | 3歳児乳歯う蝕に影響する要因の検討 母親の育児意識とう蝕予防 | 小児保健研究, 66(5), 657, 2007 | 量的研究 |
| 藤岡万里, 宗田友紀子, 他1名 | 産婦人科に併設された「赤ちゃん歯科」における親子支援 | 小児保健研究, 66(4), 576, 2007 | 量的研究 |
| 笹原妃佐子, 大谷裕幸, 他2名 | 母親の年齢及び子どもの出生順位と母親の歯科保健行動との関連 東広島誌での1歳6か月児健康診断における調査結果 | 口腔衛生学会雑誌, 57, p671, 2007 | 量的研究 |
| 笹原妃佐子, 大谷裕幸, 他2名 | 東広島市における『親子歯科健診』事業 受診率および母親の歯周状態の推移 | 口腔衛生学会雑誌, 56, 289, 2006 | 量的研究 |
| 福田英輝, 北野久枝, 他3名 | 妊産婦における歯科に関連した知識の普及状況 | 口腔衛生学会雑誌, 56, 709, 2006 | 量的研究 |
| 渡邊竹美, 糠塚亜紀子, 他4名 | 妊娠の口腔内健康状態とPrevotella intermediaの妊娠への影響 | 秋田大学医学部保健学科紀要, 14(2), 17, 2006 | 量的研究 |
| 尾上佳代子, 日野陽一, 他1名 | 出産後3～4か月の女性の口腔保健実態と妊娠との関連 | 九州農村医学会雑誌, 15, p16, 2006 | 量的研究 |
| 武田晴美, 平船忠明, 他2名 | う蝕多発地域郡山市管内の3歳児におけるう蝕の要因調査 | 福島県立医科大学看護学部紀要, 7, p25, 2005 | 量的研究 |

であった。以下、項目別の結果について述べる(表2)。

表2 母親と乳幼児の歯科保健に関する文献の内容別分類

| 分類 | 件数 | 内容 |
|---------------|----|---|
| 乳幼児の歯科保健について | 12 | 育児意識との関連(7)※ 乳幼児の生活習慣に関するもの(2) 乳幼児健診に関するもの(2) 障がい児の口腔ケア(1) |
| 母親自身の歯科保健について | 4 | 歯科健診に関するもの(4) |
| 妊娠期の歯科保健について | 5 | 妊婦の歯科に関する知識について(2) 口腔内の健康状態と妊娠との関連(2) 産前の母親教室について(1) |

※()内は対象の文献件数

1. 乳幼児の歯科保健について

乳幼児の歯科保健についてのものは12件あり、調査研究が11件、質的研究が1件であった。年代別にみると、2010年から2012年に発表されたものが多かった。内容別にみると、母親の育児意識・養育状況が大きく影響するとされるものが7件、乳幼児の生活習慣に関するものが2件、乳幼児健診に関するものが2件、障がい児の口腔ケアに関するものが1件であった。育児意識との関連についてのものが最も多く、茂川は、幼児のう蝕の状況を無う蝕群とう蝕群に分けて各要因項目について両群の比率に差がみられるかを調査している¹⁰⁾。その結果、母親の育児協力相手がいない場合と夫の育児参加のない場合で、ともう蝕罹患者の割合が有意に高いという結果を示している。また、佐藤らは、母親の歯科保健行動の関心を高めるためには、「育児は楽しい」といった肯定的な育児意識を高めていく必要があると述べている¹¹⁾。園部は、育児の楽しさを得点化し、「子どもの甘いものの摂取状況」と「おやつ時間」との関連を調査している¹²⁾。その結果、育児の楽しさ得点が高い母親は、甘い飲み物を与えていない割合が有意に高く、さらに、おやつ時間を決めている割合においても有意に高いという結果を示している。都築らは、乳幼児を持つ母親の妊娠期と育児期の口腔ケアへの意識、行動の実態を調査しており、自分自身の口腔環境よりも育児期において子どもの口腔環境への関心が高いという結果であり、妊娠期から育児期を通して長期的な支援が必要であると報告している¹³⁾。

2. 母親自身の歯科保健について

母親の歯科健診について調査したものが4件であった。年代別にみると、2007年～2010年に発表されたものが多かった。すべて調査研究であり、出産後歯科健診を取り入れている歯科医院での調査があった¹⁴⁾。調査を実施した産科では月平均100件前後の出産数であるが、2005年5月から2007年7月の約2年間で、出産後に歯科健診を

受診した母親はわずか110名であった。そのうちの107名は口腔環境の改善を目的として歯科受診を勧める必要があり、さらに、早急なう蝕治療の必要性がある母親は63名であったと報告している。

3. 妊娠期の歯科保健について

妊娠期の歯科保健については、妊婦の歯科に関する知識について2件、口腔内の健康状態と妊娠との関連について2件、産前の母親教室について1件であった。年代別にみると2006年に発表されたものが多かった。妊娠中の口腔ケアについて調査した研究では、対象の8割以上の者が「歯を磨くと出血する」など妊娠中の口腔内の自覚症状があるとした報告がある¹⁵⁾。さらに、つわりを体験した妊婦の半数は通常の口腔ケアが実施できない状況であった。また、出産後3から4か月の女性を対象にした研究では、妊娠中に口腔内に歯周病等の自覚症状があった場合、出産後もその症状が継続していることが明らかになった¹⁶⁾。そのため、妊娠期から出産、育児期を通じた歯科保健指導が必要であると述べている。産前の母親教室にて調査された研究では、母親が参考にしたいと答えた内容は、自分自身の口腔環境についてよりも、乳歯のう蝕予防に関するものが多かったとしている¹⁷⁾。

IV. 考察

1. 乳幼児の歯科保健と母親の歯科保健の関連

乳幼児期の歯科保健においては、う蝕予防が最も大きな課題である。健康日本21では2010年度の3歳児のう蝕のないものの割合は77.1%であった¹⁸⁾。しかし、最終評価において、3歳児のう蝕有病率は目標値の80%には至っておらず、さらなる改善が必要とされている。乳幼児の段階でう蝕予防を徹底することは、学童期以降の歯科保健への影響を考えると必要である。そのため、歯科口腔保健法では各ライフサイクルに応じた目標、対策を明記している¹⁹⁾。乳幼児期から日々のセルフケアが重要であるといえる。前述の歯科口腔保健法では、第6条に「国民の責務」が挙げられ、歯科疾患の予防に取り組むこと、定期的に歯科に係る健診を受けることにより、歯科口腔保健に努めるものとされている²⁰⁾。このことから、母親をはじめとする養育者の役割は大きいと考える。佐藤は、肯定的な育児意識の向上により歯科保健行動への関心が高まるのではないかと述べている²¹⁾。子どもの成長・発達への関心はどの母親も高いことが考えられるが、その中で歯の健康に関しては優先順位が低いことが予測される。子どもは身近な大人の影響を受ける。そのため、乳幼児期の歯科保健については、養育者の歯科保健についても同時に考えていかなければ、目標の達成には至ら

ないのではないかと考える。今回の対象文献では、乳幼児健康診査時に調査するものが多く、乳幼児健康診査のあり方について検討しているものもみられた。市町村や産科においてどのようにサポートしていくかが焦点となっている。乳幼児健診では、普段の育児の様子を聞き、支援していく場であるが、母親の口腔環境については触れる機会が少ない現状がある。笹原らは母親の口腔環境に着目し、1歳6か月健康診査時に母親の歯周健診と口腔ケア指導を行う「親子歯科健診」事業の成果について報告している²²⁾。乳幼児健康診査の受診率は下がらず、母親のほぼすべて歯周健診を受けており、歯科健診の受診率を確保できたとしている。今回の対象文献では、ごく一部の自治体の報告のみであり、母親の口腔環境の現状が把握できていない。そのため、今後は育児期にある母親を対象に口腔環境についての調査を実施し、現状を明らかにすることが必要であると考え。また、今回の対象文献は歯科分野からの報告が多い傾向がみられ、保健師などの保健分野の研究はあまりみられなかった。今後は歯科保健に関わる多方面からの調査が必要であると考え。

2. 妊娠期の歯科保健について

妊娠期の歯周病の発生リスクや歯周病と早産の関係など、母子健康手帳にも明記され、一般的に知られるようになっている。そのため妊娠期における歯科保健の重要性は高いといえる。今回は「母親」というキーワードを用いたため、妊娠期を対象とした文献が5件と少ないことから、2006年に発表されたものがほとんどであることから、経年的な傾向をとらえることはできなかった。渡邊らは、妊婦の口腔ケアは、単に口腔内の健康にとどまらず、身体健康、さらには女性のライフサイクルを通しての健康、次世代の健康を考えるうえでも重要であると述べている²³⁾。出産後は育児期を迎え、子どもの健康を守る役割も加わる。妊娠期から自分自身の口腔環境について行動していくことは、やはり子どもの歯科保健への影響を考えると重要であると考え。

文献

- 1) e-ヘルスネット,
<http://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/teeth/h-01-003.html>
[Online: 2013年09月04日アクセス]
- 2) 健康日本21,
http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/top.html,
[Online: 2013年09月04日アクセス]
- 3) 前掲2)
- 4) 歯科口腔保健の推進に関する法律,
http://www.shugiin.go.jp/itdb_housei.nsf/html/housei/17720110810095.htm
[Online: 2013年09月04日アクセス]
- 5) 前掲4)
- 6) 前掲2)
- 7) 園部晋也・牧内忍・川崎道子：A町における3歳児う蝕に関する母親の育児意識と歯科保健行動。沖縄の小児保健, 38, 31-36, 2011.
- 8) 茂川秀治：保育園児の齲蝕とその影響要因に関する口腔保健学的研究, 日本歯科医療管理学会雑誌, 45(2), 121-130, 2010.
- 9) 佐藤公子, 小田慈, 下野勉：3歳児乳歯う蝕に影響する要因の検討－母親の育児意識とう蝕予防－, 小児保健研究, 66(5), 657-664, 2007.
- 10) 前掲8), 663.
- 11) 前掲9), 35.
- 12) 前掲7), 128.
- 13) 都築佑子, 志村千鶴子：乳幼児を持つ母親の妊娠期および育児期の口腔ケアに関する意識と行動の実態, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 9(1), 93-103, 2010.
- 14) 藤岡万里・吉田美幸・長友文他：産科併設歯科で行う「出産後歯科健診(ママ・サポート歯科健診)」について－アンケートからの報告－, 小児歯科学誌, 47(5), 738-745, 2009.
- 15) 渡邊竹美・糠塚亜紀子・倉内淳子他：妊婦の口腔内健康状態と *Prevotella intermedia* の妊娠への影響, 秋田大学医学部保健学科紀要, 14(2), 17-28, 2006.
- 16) 尾上佳代子・日野陽一・山下直子：出産後3～4ヵ月の女性の口腔保健実態と妊娠との関連, 九州農誌, 15, 16-25, 2006.
- 17) 藤川由美・中岡友佳：乳歯齲蝕予防に関する妊産婦教育の評価-母親歯科講座における調査から-, 日本歯科衛生学会雑誌, 5(1), 89-95, 2010.
- 18) 前掲2)
- 19) 前掲4)
- 20) 前掲4)
- 21) 前掲9), 657.
- 22) 笹原妃佐子・大谷裕幸・河村誠他：東広島市における『親子歯科健診』事業：受診率および母親の歯周状態の推移, 口腔衛生学会雑誌, 56, 289-294, 2006.
- 23) 前掲書15), 26.